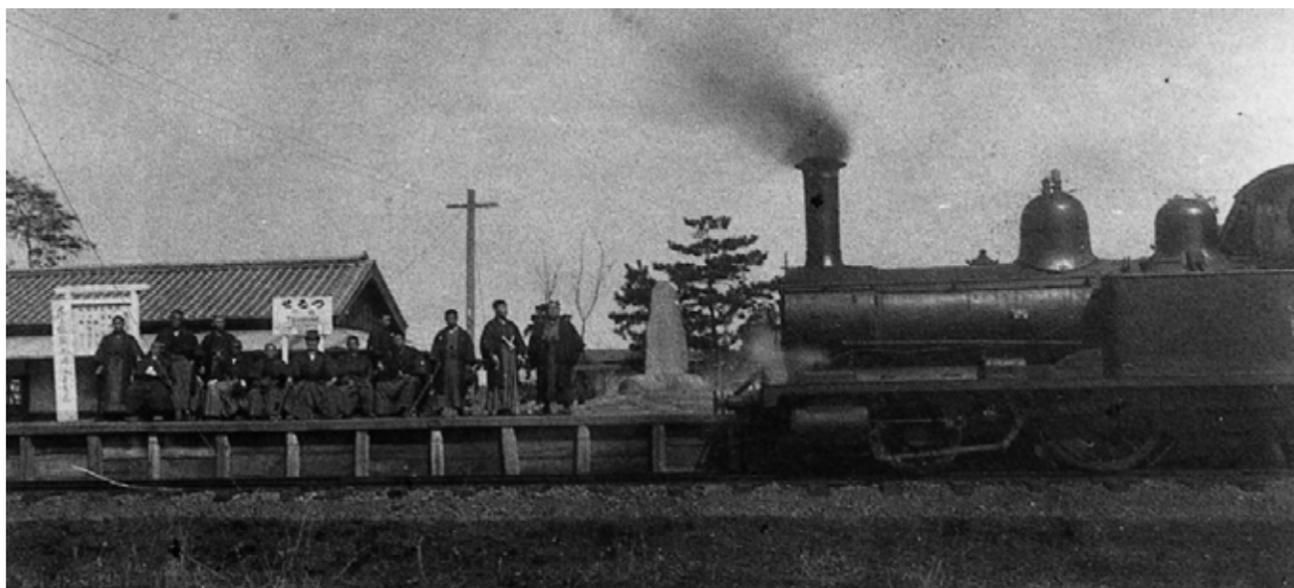


## 鶴瀬駅開設の石碑

指 定	市
種 別	有形文化財
種 類	歴史資料
員 数	2点
指定日	令和6年(2024)2月8日
所在地	鶴瀬駅東口土地区画整理8号緑地



東口駅前広場脇に移設された「鶴瀬駅開設の石碑」  
(令和7年撮影) [写真左：鶴瀬駅之碑 写真右：鶴瀬停車場記念]



駅の誘致に尽力した有志らと、開設から間もない鶴瀬駅  
(大正7年撮影) [写真中央：鶴瀬駅之碑]

### 【概説】

大正3年に開通した、東上鉄道（現東武東上線）鶴瀬駅誘致に関わった地域の人々によって建てられた「鶴瀬駅之碑（つるせえきのひ）」と「鶴瀬停車場記念（つるせていしゃばきねん）」からなる2基の石碑です。数度の移設を経たのち、長らく鶴瀬駅構内に建てられていましたが、令和5年に、2基ともに鶴瀬駅東口駅前広場脇に移設されました。

「鶴瀬駅之碑」には、鶴瀬駅が地元の協力で開設されたことや、開業日の盛大さを伝える文字が刻まれています。「鶴瀬停車場記念」の碑は、駅開設に伴って東口前の新道整備に出資した有志40名の氏名を刻銘した記念碑です。

市域から東京方面への物流が、新河岸川の舟運から鉄道へと切り替わる時代の中で、鶴瀬駅は市域と他の地域とを繋ぐ窓口として、市の近代化に大きな役割を果たしてきました。駅の誘致から開業に至るまでの経緯と、当時の人々が尽力した様子を、鶴瀬駅開設の石碑は現代に伝えています。

鶴瀬駅之碑	
表面上部 (題字)	表面下部 (本文)
鶴瀬駅 之碑	大正三年五月下旬 埼玉懸立川越中学校校教諭 小竹岡池内銀次郎 鐫書撰

表面下部 (本文)	口語訳
<p>通信と交通の便利さはどちらも、かならずや産業と民力を振興させるものだ。今や、郵便と電話の設備は都市から郊外までにも広がり、鉄道の設備もまた、郊外へ広がろうとしている。まさにこの時、地方の情勢はひとえに鉄道を利用できるかどうかにかかっている。</p> <p>人間郡鶴瀬村の有志、横田源九郎氏は、東上鉄道が創設されるにあたって、この機を逃さぬよう皆と話し合い、出資金をもって停車場を建設した。中武に位置するこの村は、物資が集散する拠点となるべき場所だ。</p> <p>大正三年五月一日、汽車が開通したこの日は、天気は晴れ、空気は清々しく、いちだんと見晴らしがよい。朝、長い煙が蛇のようにうねうねと吐き出されるのを見て、老いも若きも歓声を上げる様は、例を見ないほど、実に盛大なことであった。</p> <p>今、この線路をよく利用することは、この村を発展させるだけではなく、中武の産業を振興させることにつながる。そうなれば、皆の取り計らいの苦労も無駄にはならないだろう。</p> <p>故郷の先輩である星野仙蔵氏は、終始一貫して鉄道の敷設に力を尽くした。この駅があるのも、あなたの協力あつてのものだ。ある日、あなたは私のもとへ訪れ、一文を求める有志の意を伝えてきた。あなたと私は古いなじみで、断ることなどできるはずもない。よって、ここにこの詩を刻む。</p> <p style="text-align: center;">             郵便通信 退邇轉瞬 鐵路運輸 有無相賑              坦々武陽 地饒人儁 汽輪一過 産殖業振           </p> <p>(郵便と電話は瞬く間に遠方を身近に変える            鉄道による輸送は双方を互いに豊かにする            担々たる武陽の土地は豊かで人々は優秀だ            汽車の往来は産業を盛り上げることだろう)</p>	東上鉄道社長勲四等根津嘉一郎篆額

鶴瀨停車場記念

表面	側面	裏面
<p>鶴瀨停車場記念</p>	<p>大正参年五月一日建立 建設者有志</p>	<p>金拾圓 寄付者連名              金五圓              金五圓              金三四圓              金三圓</p> <p>山田與平 澁川喜左工門 横田玄司郎 森田辰五郎 石井金兵衛 長根伝太郎 長野芳五郎 山月大右郎 山城藤左工門 星野尚兵門 森田宗兵門 横田右工門</p> <p>田中龜吉 石井金兵衛 横田賢次郎 長根伝太郎 長野芳五郎 山月大右郎 山城藤左工門 山野七郎 星野五郎 森田五郎 横田五郎</p> <p>田中龜吉 萩原萬兵衛 加藤之助 馬場吉吉 森田清吉 横田與兵衛 横田常吉 島田春吉 浅井三郎 長根五郎 島田茂左工門</p> <p>鶴瀨村 田中龜吉</p>